酒匂川水系における鮎漁獲量の推計について（要旨）

佐藤　茂・鈴木規夫
村山隆夫・石崎博美

河川の総合開発は魚類の成長、産卵の為の溯上通路の遮断並びに流量の減少を含めた棲息河川環境に変化をもたらし、河川の漁業生産性の低下を誘発させ、河川の水産資源の維持、増殖に憂慮すべき多くの問題を提起している。

本調査対象の酒匂川は本県企業庁の酒匂川総合開発計画により、日量２００万トンの取水計画があり、漁業生産の実態も自ら変化するものと考えられ、鮎を主体とした漁業生産力を明確に把握し、本水系の漁業生産を合理的に管理するために必要な諸資料を得る目的で昭和４４年度に引きつづき実施した。

なお、本調査については神奈川県農政部水産課、同淡水魚増殖場が合同で実施し、すでに「酒匂川漁業実態調査報告書」（昭和４６年３月）として報告されているので、要旨のみを報告する。

推定漁獲量は昭和４５年６月から１０月までの4.5か月の調査期間中に約4,１５５千尾（９７３トン）の記録を示した。昭和４４年度は調査期間が８月から１０月までの２.５か月間であったが約３６トンを示し、昭和４５年度と同様の傾向を示すと考えれば昭和４４年６月から１０月までに約６４トン漁獲されていることが推定できる。神奈川農林水産統計年報によれば昭和４３年は３８トンとなつており、また昭和３９年以前５年間における漁獲量は６５トン～８５トンの報告をしており、本調査結果に近似を示している。昭和４４年と４５年の推定漁獲量を比較すると約１.５倍、昭和３９年以前の５か年間の比では約１.３倍の開きを示しており、漁獲努力数および資源量の変動が考えられる。昭和４５年度の漁獲努力数は４４８,２４１人を記録しており、昭和４４年度の１０５,７６７人（換算数値２０５,５５２人）とは約２倍近い値に増加している。酒匂川漁業協同組合の遊漁承認証販売実績表から日釣券販売数は３０％増となっており、出漁者数が増加したことを示していると言える。また、１尾あたり平均体重及び１日１人あたりの漁獲量についてみると、昭和４４年８.２１尾（３４５g）に比べ４５年の値９.２７尾（２１７g）は小さくなっており、酒匂川における気象条件に有意な差はなかったと考えられるので、あゆの餌料生物生成量がほぼ同様であるとすれば、あわの個体重の減少は資源量の増大による餌料生物分配量の減少を示していると言える。本川のあゆ生息漁獲水域の総面積は1,１１６,５１０m^2であって、昭和４５年度の漁獲量でm^2あたり生産量を算出すると８７g（平均体重２３.４g×３.７尾）であり、これは本邦のあゆ溯上可能河川におけるあゆの生産力（平均体重２０.９g～１８２.２g×０.１尾～５.４尾）から推してあり得る数値である。